

南米チリの日本語教育の始まり

ーチリ・サンティアゴ大学 日英翻訳課程の設立背景ー

飯泉李子(Universidad de Santiago de Chile) Raquel Rubio(Universidad de Santiago de Chile)

1. 研究背景と先行文献

本発表は、「チリの日本語教育の軌跡と未来」という研究プロジェクトの一部である「チリの日本語教育の始まり」についてまとめたものである。主にチリ・サンティアゴ大学人文学部言語文学学科の日本語 - 英語翻訳課程 (Universidad de Santiago de Chile, Facultad de Humanidades, Departamento de , Carrera de Traducción Japonés - Inglés) での設立背景について資料と当時の大学関係者や日本語教師のインタビューを通し分析し、今後のチリの日本語教育について考察する。

チリ・サンティアゴ大学 (以下, USACH (ウサッチ)) は, 南米スペイン語圏で唯一日本語を専門に教える高等教育機関である。1993年の選択科目としての日本語講座を経て, 95年に正式に課程として設立され, 現在までに多くの卒業生を出している。中には, 在チリ日本大使館, 日智商工会議所, 各種日本企業で働いている卒業生もいる。

2024年, 現在のカリキュラムでは1年次に英語に加え日本語とポルトガル語を学び, 2年次から専門言語を選ぶことができる。5年次までに, 日本語能力試験 (JLPT) N2レベルを目指している。南米スペイン語圏では珍しくより高い日本語レベルの取得を目指したカリキュラムになっている。

チリでの日本語教育の歴史は, その他の南米諸国とは異なる。なぜなら, アルゼンチンや, ペルーのように, 日系人の集団移住が行われていないためだ。(国際交流基金 サンパウロ日本文化センター, 2017) 南米の日本語教育は, 日系人が自信の子どもたちに日本語や日本文化を継承したいという思いから始まった場合が多い。(葦原, 2016; 近藤, 2022) チリの日本語教育は1975年に日智文化協会で日本語講座が始まったことがきっかけであるが, 始めからチリ人への外国語としての日本語教育が目的であった。(堀川, 2006)

では, 日系の影響が少ないチリに唯一高等教育機関に日本語専科が設立されたのだろうか。本研究では, チリの日本語教育, 主にUSACHの日本語教育の誕生について当時の日本, チリの政治情勢, 外交関係資料を通し, 日本語課程設立の背景を調査した。また, 当時の大学および日本語教育関係者にも話を聞いた。

2. 目的と方法

本研究では, USACH 日本語 - 英語翻訳課程の設立背景を明らかにすること, そして今後のチリ, 南米スペイン語圏の日本語教育を盛り上げるために, すべきことを模索することを目的としている。

まず, 課程の設立背景を明らかにするため, チリ共和国の外交資料, JICA や国際交流基金などの資料から, 当時の経済状況や外交背景を分析した。チリ共和国の外交資料に関しては, 主に外交アカデミーで閲覧できる在日チリ大使館の外交記録を閲覧し, その内容を当時の新聞記事と照らし合わせた。日本関連の資料は, 主に, 国際交流基金の資料から外交政策を, その他の外交資料や記録から経済状況を分析した。

次に, 具体的に日本語英語翻訳課程の設立に関わった当時の大学関係者と日本語教師にインタビューを実施し, その結果を事前の資料調査を照らし合わせ, 事実の確認を行った。インタビューの対象者は, 課程設立のきっかけを作ったプラネタリウム元館長のR氏と日本語 - 英語翻訳課程の設立に大きく貢献したK先生である。K先生は, 93年の選択科目としての日本語講座から翻訳課程の設立に関わっている先生であり, 2017年まで教壇に立っていた。R氏は, 当時のプラネタリウム館長として, 日本政府からのオーディオ機材の寄付を受け取り, その後課程設立のきっかけを作った人物である。

以上の結果をもとに, 今後の研究を進めていく上での課題と, 今後のチリの日本語教育の在り方について考察している。

3. 結果

3.1 政治的・経済的背景（資料調査）

1989年は、チリ、日本共に大きな変化があった年である。日本では、「昭和天皇が崩御された1989年1月7日「元号を改める政令」（昭和64年政令第1号）で、新しい元号を「平成」とすること、及びこの政令が公布の日、翌日から施行され1月8日から、元号が平成となった¹。一方、チリでは、88年に国民投票によって決定された大統領選挙実施さ、89年12月14日にキリスト教民主党から立候補していたAylwin（エルウィン）大統領の勝利により、約7年続いた独裁政権が終わりを告げた重要な年でもある²。

この民主主義の勝利をきっかけに、国際社会でのイメージを回復するために、チリ共和国はより開かれた国になったことを国際社会にアピールしなければならなかった。その頃のチリにとって、アジアに対して新しい「チリ」をアピールするために、日本は非常に重要な国であった。1992年には、Aylwin大統領は、チリ共和国大統領として初来日を果たす事となった。当時の新聞は「日本はチリをアジアに導く扉だ」と報じた³。天皇陛下も皇后とAylwin大統領とその夫人を暖かく迎えた⁴。さらに、早稲田大学は、名誉博士号を贈呈するなど、チリを民主化に導いた大統領としてチリをアピールし、今後のチリの発展のためのサポートを日本に求めた。その頃、90年代の日本は、ODA支援額で世界トップとなり、国際的地位の向上を図っていた。（国際協力局政策課、2014）

つまり、独裁政権から民主主義化に成功し、これからの発展のために経済的支援が必要なチリと、ODAへの投資を増やし、国際社会でその地位を築いている日本の関係は互いの意図が合致するものであったと思われる。さらに、92年のAylwin大統領の来日以前から、日本からチリへの支援は様々な形で行われており、チリ国民にとって日本は新しい国、豊かな国、技術的に発展している国として憧れの対象でもあった。実際、91年には、USACHのプラネタリウムにオーディオ機材の寄付が行われている⁵。そして、課程設立の提案がされた後、94年には、日本政府からLL機材の寄付も行われた⁶。（日本チリ交流史編集委員会、1997）

チリの民主化、日本のODA戦略など、二国の政治的、経済的国際戦略によりチリにとって日本がより重要国の1つとなったと言える。つまり、当時のチリでは、日本の経済支援や技術協力が高まり、日本への関心が高まり、日本語教育の需要が増加したと考えられる。

3.1 関係者の視点（インタビュー結果）

資料から分かるように90年代初頭、チリにとって日本は外交、政治的に重要な国であった。一方、チリ人にとっては豊かな国、経済的、技術的にも発展した国として憧れの対象であった。その頃、91年の本校プラネタリウム館長は、自身の親族を通して、在チリ日本大使館の文化担当官M氏と知り合う事となった。スペイン語が堪能だった文化担当官M氏とR氏は、意気投合し、とても親しい関係になったようだ。そして、日本からのプラネタリウムへのオーディオ機材の寄付が実現した。また、日本大使館文化担当官のM氏はチリの大学で日本語教育を始める提案をした。そこで、R氏とM氏は、USACHに日本語と英語を教える課程を作るために、互いに協力することになった。以下、M氏を懐かしみ、現在のM氏への想いと日本語-英語課程への希望を話しているR氏の言葉を引用する。

R氏 “Yo estoy tratando de ubicarlo ahora porque me dijo, ubícame de alguna forma para...que nos coloquemos de acuerdo y hacer algo por mejor, porque el idioma no se puede perder, el idioma inglés-japonés, japonés, por ningún motivo, hay que seguir la carrera.”（彼にまた会いたいと思っている。一緒に（課程のために）より良いことをしたい。日本語、英語はどんな理由があっても、なくてはならない言語だ。日本語-英語課程は続いていかなければならない。）⁷

¹ 参議院法制局 HP「改元とそれに伴う法律改正について」（<https://houseikyoku.sangiin.go.jp/column/column104.htm>）より

² Memoria Chilena (Biblioteca Nacional de Chile) HP “El Plebiscito de 1989” より

³ La Nación 1992年11月12日(日) “Japón: La puerta de entrada de Chile a Asia”

⁴ Fundación Patricio Aylwin 写真資料より

⁵ República de Chile La Academia Diplomático,1991, Registros Diplomáticos Relación Chile y Japón より

⁶ República de Chile La Academia Diplomático,1991, Registros Diplomáticos Relación Chile y Japón より

⁷ R氏の言葉を筆者が日本語に翻訳

R氏とM氏が日本語 - 英語課程の設立に前向きになっていた頃、日智文化協会で日本語を教えていたK先生はチリ・カトリカ大学⁸で日本語講座も担当していた。既に大学で教える経験があるということで、USACHでの日本語 - 英語課程設立に向けて、先生に声がかかった。以下、K先生の言葉を一部引用する。以下の言葉から、USACHが他大学以上に「日本語科」を作りたいという意欲あったことがわかる。

K先生「チリの（日本）大使館の文化担当の方がね、いろんな大学来たんだけど、USACHだけね。自分たちで（資金等を）用意しますと。だから、（中略）USACHに協力しましょう。（ということになった）」

だが、なぜ「日本語と日本文化を学べる課程」ではなく、「日本語と英語を学べる」課程だったのだろうか。その答えは、チリの大学制度や、価値観に関係している。チリの大学は基本的に5年制である。現在の日本語 - 英語翻訳課程も、4年間で学位を取得するのだが、これは日本の大学を卒業し、学位取得するという意味とはことなる。5年目に「日英専門翻訳者としての資格（Licenciado en Lingüística aplicada a la traducción mención en Inglés y Japonés）」を取得することで、日本の大学の卒業と同じ意味を持つのである。この「資格」というのは、チリ社会では非常に重要であり、これがなければ専門家として働くことはできない。この「資格」は通常、卒業後の職業選択に直結する。そのため、課程の内容を「仕事」に繋げることが難しい「日本文学学科」や「日本語学科」では、学生を獲得できないと考えられたのだろう。そこで、国際言語として既に認められていた「英語」と「日本語」と組み合わせることで、より魅力的な課程になったのである。

この選択は、その後の課程の発展に大きな意味を持ち、2024年現在まで本校の人気課程の1つになるまでに成長した理由の1つでもあるが、当時の教師にとっては大きな課題であった。そもそも、日本語教育機関は当時、日智文化協会の一校のみであり、さらには、日本語だけではなく、日本語の翻訳を教えなければならないということで、試行錯誤の日々だったと話した。以下K先生が当時の授業について語った言葉を一部修正して、引用する。

K先生「日本語の本をスペイン語に翻訳した本がありますよね。それを読ませたんです。比べなさいって。あの頃はインターネットなかった頃ですけど、それをプリントとしてコピーして、（中略）いろいろな翻訳を比べてみました。」

一方で、日本語教育の準備が十分ではない分を英語専門の教授たちが、カリキュラム作成のアドバイスをするなど、助けになったようだ。以下はK先生がカリキュラム作成についての苦勞を語った一部である。

K先生「大学のカリキュラムって自分は受けたことあるけどね、作ったことないですよ。ね。（中略）だからスペイン語の先生、英語の先生、歴史の先生もあと、いろんな先生とグループを作って、考えたんです。カリキュラムも一緒に。」

ただ、日本語教師としては、英語 - 日本語翻訳課程ではなく、日本文化・日本語学科のような日本語がメインの課程を希望したようだ。しかし、前述したチリの教育制度や価値観、教師不足、就職に直結しない点から現実的ではなかったのだろう。課程を正式なものにするためのカリキュラム作成や教師の確保、学生の獲得という点で、結果的に「日本語 - 英語翻訳課程」は、よい選択だったと言ってよいだろう。

4. まとめ

1990年代のチリの民主化により日本との文化交流がそれ以前より進み、日本のODA戦略など二国の政治経済事情が後押し、在チリ大使館元文化担当官とUSACHプラネタリウム元館長の「チリの大学で日本語を教える」という案を実現することができた。そして、実際に課程設立に関わった日本語教師のチャレンジ精神と試行錯誤、様々な関係者の尽力により、本課程は現在まで発展してきたことが分かった。何か1つ欠けても、2024年現在まで続く1つの正式課程であり続けることは、難しかっただろう。

特に、日本語教師K先生の貢献は非常に大きかった。当時は、インターネットも今ほど便利でなく、教材や教員も

⁸ Pontificia Universidad Católica de Chile チリで最も古い大学の1つ

少ないなか、在チリ日本人コミュニティに声をかけ、学生たちが日本人と日本語で関わる機会を作るなど、学生たちの動機付けに役に立っていた。今後、先生や学生たちの視点から具体的な日本語教育方法や目的の変遷についても調査、分析していく必要がある。

また、インターネット利用が手軽になった今、日本にいる日本人、世界中で日本語を学ぶ学習と繋がるなど、可能性も広がっている。また、「日本語」の需要は当時と異なっている。当時は、日本の経済発展や技術開発などに興味を持つ学生が多かったが、今では、アニメや漫画が日本語への入り口になっている場合がほとんどである。入学時に既に日本語が分かる学生もいる。日本語学習をしたことがなくても、日本語を聞いたことがあり、日本文化の知識も多様になってきている。

反面、90年代と変わらないこともある。当時の学生たちも、今の学生たちも、日本に対して憧れを持ち、日本語を一生懸命学習している。今まで以上に日本が近い国になったことで、将来仕事で日本語を使うことをイメージしやすくなったのではないだろうか。さらに、現在多くの卒業生が日本語を教えており、小さな日本語教育機関も増えてきている。

以上のことから、今後のチリの日本語教育を考える上で、本課程の設立は大変大きな出来事であった。関係者の想いを繋げるとともに、新しい学生たちの夢を叶える手助けができるよう、新しい技術と新しい価値観を取り入れながら発展させ、さらに当時のように日本政府機関等外部機関とも協力していく必要があると考える。

5. 謝辞

本研究プロジェクトは、チリ・サンティアゴ大学の DICYT (Dirección Investigación Científica y Tecnológica) の DICYT Regular の枠組みで助成を受け、実施されている。

また、チリの外交資料閲覧やご自身の人脈から重要人物を繋げていただくなど、ご助力頂いた本校 Profesora Mónica に、この場を借りて、お礼を申し上げたい。

さらに、貴重なお話を快く聞かせてくださった USACH プラネタリウム元館長 R 氏、元日本語コーディネーター K 先生にも改めて、感謝を申し上げます。お二人の協力がなければ、本研究を進めることはできなかつたろう。

6. 参考文献

- 葦原, 恭子. (2016年). アルゼンチンにおける日本語教育の現状と課題: ブエノスアイレス日亜学院の事例から. *移民研究 immigration Studies*, 12(2016-10), 61-80. <http://hdl.handle.net/20.500.12000/36889>
- 近藤, 弘,. (2022年). コロンビア日本人移住地における日本語教育の意義 —光園創設者ハナさんのライフストーリー分析を通して— "言語文化教育研究 *Studies of Language and Cultural Education*, 20, 157-179. <https://doi.org/10.24564/0002010085>
- 堀川, 徹. (2006年). チリの日本語教育事情 (特集=南米の日本人と日本語; 南米と日本語), *国文学: 解釈と鑑賞 / 至文堂 編* 71, 71, 172-177.
- 国際協力局政策課. (2014年). *Official Development Assistance ODA 60 年の成果と歩み*.
- 国際交流基金 サンパウロ日本文化センター (2017年). *南米スペイン語圏日本語教育実態調査報告書2017* https://fjisp.org.br/wp-content/uploads/2018/03/00_南米スペイン語圏日本語教育実態調査報告書2017_v45.pdf
- 日本チリ交流史編集委員会. (1997年). *日本チリ交流史* (日本チリ交流史編集委員会, 編). 日本チリ修好100周年記念事業組織委員会.
- República de Chile. (1992年). *Registros Diplomáticos 1992 Relación Chile y Japón* (pp. 91-95). La Academia Diplomática.
- República de Chile. (1994年). *Registros Diplomáticos 1994 Relación Chile y Japón* (pp. 75-80). La Academia Diplomática.